

# 演習問題 解答

## 第1回

第1問 (1)  $a, b$  を実数として,  $z = a + bi$  とおく.

$$0 = z - \bar{z} = (a + bi) - (a - bi) = 2bi$$

より  $b = 0$  である. すなわち  $z$  の虚部は  $0$  であるから,  $z$  は実数である.

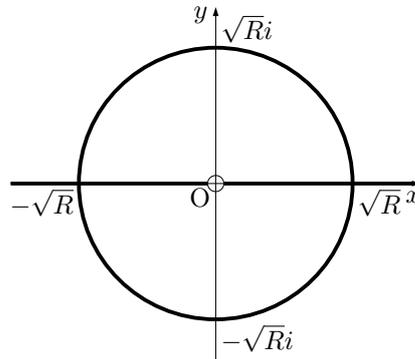
(2) (1) より,  $\alpha$  が実数となる時,  $\alpha - \bar{\alpha} = 0$  が成り立つ.  $\alpha - \bar{\alpha}$  を計算すると,

$$0 = \alpha - \bar{\alpha} = \left(z + \frac{R}{z}\right) - \overline{\left(z + \frac{R}{z}\right)} = \left(z + \frac{R}{z}\right) - \left(\bar{z} + \frac{R}{\bar{z}}\right) = z + \frac{R}{z} - \bar{z} - \frac{R}{\bar{z}}$$

両辺に  $z\bar{z}$  をかけて

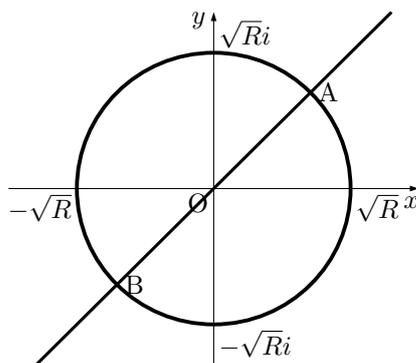
$$\begin{aligned} 0 &= z^2\bar{z} + R\bar{z} - z\bar{z}^2 - Rz = |z|^2z + R\bar{z} - |z|^2\bar{z} - Rz \\ &= |z|^2(z - \bar{z}) - R(z - \bar{z}) = (z - \bar{z})(|z|^2 - R) \end{aligned}$$

したがって,  $z - \bar{z} = 0$  または  $|z|^2 - R = 0$  が成り立つ. 1つ目の式は (1) で示した  $z$  の実数条件に他ならない. また,  $R > 0$  であるから, 2つ目の式は  $|z| = \sqrt{R}$ , すなわち原点を中心とした半径  $\sqrt{R}$  の円である. ここで,  $\alpha$  の定義より  $z \neq 0$  であることに注意すると, 求める  $z$  の全体は



上の図の太線部分, 半径  $\sqrt{R}$  の円周および実軸上である. ただし, 原点は含まない.

(3)  $|z - 1 - i| = |z - (1 + i)|$  は複素数  $z$  と複素数  $1 + i$  との距離を表す.  $z$  は (2) の条件を満たし, かつ実数でないから, (2) の図の半径  $\sqrt{R}$  の円周上にある. この円周上で  $1 + i$  との距離が最大, 最小をとるとすると,  $z$  は原点および  $1 + i$  を通る直線上であるから, 次の図の2点 A, B であることがわかる.



点 A を表す複素数は  $\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}}i$ , 点 B を表す複素数は  $-\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}}i$  であるから,  $|z - 1 - i|$  の最小値は,  $z$  が点 A にあるとき

$$\begin{aligned} |z - 1 - i| &= \left| \left( \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - 1 \right) + \left( \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - 1 \right) i \right| \\ &= \sqrt{2 \left( \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - 1 \right)^2} = \left| \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - 1 \right| \sqrt{2} = \left| \sqrt{R} - \sqrt{2} \right|. \end{aligned}$$

最大値は  $z$  が点 B にあるとき

$$\begin{aligned} |z - 1 - i| &= \left| \left( \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + 1 \right) + \left( \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + 1 \right) i \right| \\ &= \sqrt{2 \left( \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + 1 \right)^2} = \left| \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + 1 \right| \sqrt{2} = \sqrt{R} + \sqrt{2}. \end{aligned}$$

第 2 問 (1)  $BC = 2\sqrt{2}$  であるから, この正四面体の 1 辺の長さは  $2\sqrt{2}$  である. すべての面が正三角形であるから, この立体上の任意の頂点 X, Y, Z に対して

$$\vec{XY} \cdot \vec{XZ} = 2\sqrt{2} \cdot 2\sqrt{2} \cdot \cos 60^\circ = 4$$

が成り立つ. よって

$$4 = \vec{AD} \cdot \vec{AC} = (x - 3, y - 5, z) \cdot (0, -2, 2) = 2y + 2z + 10 \quad \text{より} \quad z = y - 3$$

$$4 = \vec{AD} \cdot \vec{AB} = (x - 3, y - 5, z) \cdot (-2, -2, 0) = -2x - 2y + 16 \quad \text{より} \quad x = 6 - y$$

を得る. また,  $AD = 2\sqrt{2}$  であるから,

$$8 = AD^2 = (3 - y)^2 + (y - 5)^2 + (y - 3)^2 = 3y^2 - 22y + 43 \quad \text{より} \quad (3y - 7)(y - 5) = 0.$$

$z > 0$  より  $y - 3 > 0$  であるから,  $y = 5$  である. したがって,  $x = 1, y = 5, z = 2$ .

(2) 正四面体の 1 つの面の面積は  $2\sqrt{3}$  である. また, 点 A から辺 BC に垂線をひき, BC との交点を H とすると,  $AH = \sqrt{6}$  である. 正四面体の内接球は各面の重心で接するから,  $\triangle ABC$  の重心を G とすると,  $HG = \frac{1}{3}AH = \frac{\sqrt{6}}{3}$ .  $DH = \sqrt{6}$  であるから, 三平方の定理より,  $DG = \frac{4\sqrt{3}}{3}$ . したがって, 正四面体の体積  $V$  は

$$V = \frac{1}{3} \cdot 2\sqrt{3} \cdot \frac{4\sqrt{3}}{3} = \frac{8}{3}.$$

となる。ここで、球  $S$  の半径を  $r$ 、中心を  $T$  とすると、立体の体積について

$$\begin{aligned} V &= (\text{四面体 } TABC) + (\text{四面体 } TABD) + (\text{四面体 } TACD) + (\text{四面体 } TBCD) \\ &= \frac{1}{3} \cdot 2\sqrt{3} \cdot r \times 4 = \frac{8\sqrt{3}}{3}r \end{aligned}$$

である。したがって、 $r = \frac{1}{\sqrt{3}}$ 。

また、球  $S$  の中心から平面までの距離は、正三角形  $PQR$  を底面に見たときの四面体  $TPQR$  の高さである。点  $P, Q$  の座標はそれぞれ三角形の重心であって

$$P\left(\frac{7}{3}, \frac{11}{3}, \frac{2}{3}\right), \quad Q\left(\frac{5}{3}, \frac{13}{3}, \frac{2}{3}\right)$$

であるから、 $PQ = \frac{2\sqrt{2}}{3}$  である。  $TP = r = \frac{1}{\sqrt{3}}$  であったから、 $DG$  の長さと同様に求めると、求める距離は  $\frac{\sqrt{3}}{9}$ 。

- (3) 直線  $DT$  を  $x$  軸、点  $T$  を原点としてみると、求める体積は  $y = \sqrt{\frac{1}{3} - x^2}$  と直線  $x = \frac{\sqrt{3}}{9}$  および  $x$  軸によって囲まれた領域を  $x$  軸の周りに 1 回転させて得られる立体の体積であるから、

$$\pi \int_{-\frac{1}{\sqrt{3}}}^{-\frac{\sqrt{3}}{9}} \left(\sqrt{\frac{1}{3} - x^2}\right)^2 dx = \frac{28\sqrt{3}}{729}\pi.$$

- 第 3 問 (1) 奇数が書かれた玉は 5 つの中の 3 つだから、 $P_1 = \frac{3}{5}$ 。また、 $n \geq 2$  のとき、 $n$  回目の和が奇数になるためには、 $n-1$  回目までの和が奇数で、かつ  $n$  回目に偶数を引くか、 $n-1$  回目までの和が偶数で、かつ  $n$  回目に奇数を引けばよい。ここで、 $n-1$  回目までの和が奇数である確率は  $P_{n-1}$ 、偶数である確率は  $1 - P_{n-1}$  と表せるから、

$$P_n = \frac{2}{5}P_{n-1} + \frac{3}{5}(1 - P_{n-1}) = -\frac{1}{5}P_{n-1} + \frac{3}{5}$$

が成り立つ。したがって、 $\{P_n\}$  についての漸化式

$$P_{n+1} = -\frac{1}{5}P_n + \frac{3}{5}, \quad P_1 = \frac{3}{5}$$

を得る。

- (2) (1) で得られた漸化式は

$$P_{n+1} - \frac{1}{2} = -\frac{1}{5}\left(P_n - \frac{1}{2}\right)$$

と変形できる。数列  $\{P_n - \frac{1}{2}\}$  は初項  $P_1 - \frac{1}{2} = \frac{1}{10}$ 、公比  $-\frac{1}{5}$  の等比数列であるから、

$$P_n - \frac{1}{2} = \frac{1}{10}\left(-\frac{1}{5}\right)^{n-1}$$

ゆえに

$$P_n = \frac{1}{10}\left(-\frac{1}{5}\right)^{n-1} + \frac{1}{2}.$$

である。また、 $\left|-\frac{1}{5}\right| < 1$  であるから

$$\lim_{n \rightarrow \infty} P_n = \frac{1}{2}.$$

(3) (2) より  $\alpha = \frac{1}{2}$  であるから,

$$\begin{aligned}\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \left( \frac{Q_k}{Q_n} \right)^{\frac{1}{n}} &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \left( \frac{\frac{1}{10} \left(-\frac{1}{5}\right)^{k-1}}{\frac{1}{10} \left(-\frac{1}{5}\right)^{n-1}} \right)^{\frac{1}{n}} = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \left\{ \frac{(-5)^{n-1}}{(-5)^{k-1}} \right\}^{\frac{1}{n}} \\ &= \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \{(-5)^{n-k}\}^{\frac{1}{n}} = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n (-5)^{1-\frac{k}{n}}\end{aligned}$$

である. 区分解法を用いれば

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n (-5)^{1-\frac{k}{n}} = \int_0^1 (-5)^{1-x} dx = \left[ \frac{-(-5)^{1-x}}{\log 5} \right]_0^1 = \frac{4}{\log 5}.$$